

ブルーツーリズムを核とした町おこし  
—海しょくにんの“推し”が人を呼び込む！—

南三陸海しょくにん  
高橋 直哉

1. 地域の概要

私たちの住む南三陸町歌津地区は、宮城県の北東部にある南三陸町の北側に位置する。東は太平洋に面し、西には霊峰田東山をはじめとする北上山地の山々が連なる、海山が一体となった自然豊かな地域である。沿岸部はリアス海岸特有の景観であり、中央の泊崎半島を境に北は小泉湾、南は伊里前湾に面している。昔から水産業が盛んな地域である（図1）。

また当地区は、約2億5,000万年前の中生代前期に生息した、歌津の名を冠する魚竜「ウタツギョリュウ」の化石産地として有名である。



図1 歌津地区の位置

2. 漁業の概要

私たちの所属する宮城県漁業協同組合歌津支所の組合員数は783人で、主にワカメ・ホタテガイなどの養殖業、アワビ・ウニなどの採介藻漁業が営まれている。令和3年度の販売取扱金額は11億6,000万円で、内訳はワカメが8億円、次いでホタテガイの1億8,000万円となっている（図2）。

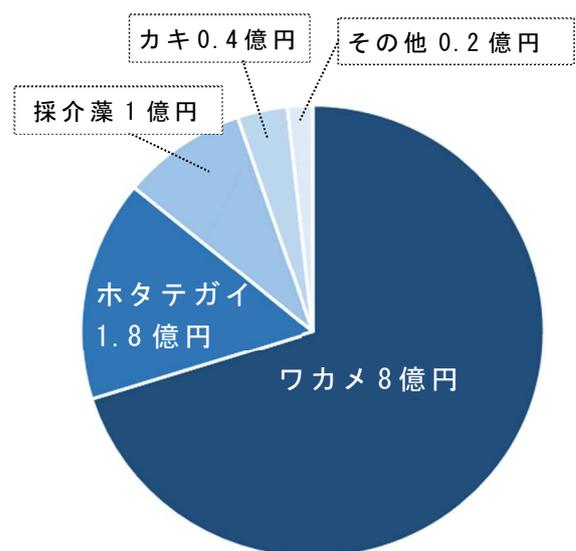


図2 令和3年度販売取扱金額

### 3. 研究グループの組織と運営

「南三陸海しょくにん」は平成 26 年に発足した。グループの運営は代表 1 人、副代表 1 人、会計 1 人、監事 1 人で、当初 5 人で始まったが現在では 26 人にまで増えている（写真 1）。

主な活動として、個人・団体を対象とした養殖体験や釣り船体験を行っている。現在は、県



写真 1 南三陸海しょくにんのメンバー

内外の多くの人から申込みが殺到し、会員一丸となって対応している状況である。また、会の運営に当たっては南三陸町観光協会の協力を得ており、イベント告知やプログラムの作成などを共同で行っている。

なお、「しょくにん」が平仮名なのは「職」と「食」の両方を体験してほしいという思いから、メンバーで考えて名付けたものである。

### 4. 研究・実践活動の取り組み課題選定の動機

東日本大震災により、当地区は甚大な被害を受けた。ほとんどの漁業者は漁船や漁具を失い復旧を諦めかけていたが、ボランティアとして全国から多くの方々が駆けつけ、ガレキ撤去から漁業支援まで多岐にわたり支えてくれた。献身的に復旧支援に取り組むボランティアの方々の姿を目の当たりにした私は「恩返しをしたい」「笑顔で帰ってもらいたい」という思いが湧き上がり、感謝の気持ちを込めて、復旧した養殖施設で生産したホタテガイやワカメの収穫体験や釣り船体験を提供したほか、取ってきた海の幸を振る舞った。この時のボランティアの方々の笑顔を見て、私は津波によって忘れかけていた南三陸町の海の豊かさと楽しさ、幼い頃から海に親しんでいたことを思い出した。そしてたくさんの人に南三陸町の海の楽しさとおいしさを知ってもらえることができれば、そのことによって交流人口が増え、地域の復興や活性化につながっていくのではないかと考えた。

しかし、私ができる養殖体験や釣り船体験は、1人で受け入れるには限界がある。そのことを仲間の漁師に相談したところ、有志が集まり漁業を通じて海を楽しむ「ブルーツーリズム」の要素を取り入れた新しい漁業に取り組もうという話で盛り上がり、その活動母体として「南三陸海しょくにん」を結成することになった。結成後、この町に来てくれた人たちを笑顔にできる仕事として、さまざまな体験事業に取り組み、南三陸町の豊かな魅力を発信することとした。

## 5. 研究・実践活動の状況および成果

### (1) 推し! その1 養殖体験

南三陸町で行われている養殖業の魅力を伝えるため、湾内の養殖漁場を案内し、水揚げ作業を参加者と一緒に行っている。春（3月～4月）はワカメの収穫、夏から秋（5月～10月）はホヤやホタテガイの水揚げを体験してもらっている（写真2、3）。

参加者は、平日は課外授業で訪れる県内の小・中学生がメインだが、週末や行楽シーズンは家族連れや団体客でにぎわい、年間約2,000人が利用する。帰港後は、岸壁で養殖方法の講義やロープワーク実習、事前に採捕した磯の生物などの観察も行い、参加者を飽きさせないように工夫している。近年では、カキの養殖にはホタテガイの貝殻を再利用していることや、河川から流れてくる栄養によって海の養殖生産物が育まれていることを教えるなど、SDGs（持続可能な開発目標）の理念に沿った講義を行っている。



写真2 ホヤの養殖体験



写真3 ホタテガイの養殖体験

### (2) 推し! その2 手ぶらでフィッシング

私たちは、釣りを通じて南三陸町の海の魅力を味わってほしいという思いから、「手ぶらでフィッシング」を考案した。釣りざおから餌まで全て用意し、船釣りの未経験者でも気軽にカレイ釣りを楽しむことができるように工夫した。また、船釣り初心者でも参加できるように、船酔い対策として運行時間を2時間としている（写真4）。

なお、このイベントではあまりプログラムを作り込まず、参加者と自然体で交流し、楽しんでもらうことを心がけている。そのため釣り場まであえて遠回りして、沿岸の美しい景色とその場での会話を通じて日常では味わえない体験を提供している。この「手ぶらでフィッシング」も県内外から年間約300人が訪れる人気のイベントとなっている。



写真4 ビギナーに人気の「手ぶらでフィッシング」

### (3) 推し！その3 芋煮会で交流会

復興への支援に対する感謝や交流人口拡大への期待を込めて、平成26年から地元の商業施設を会場にして芋煮会を開催している(写真5)。開催に際しては「金はないが食材ならある！」と海、山のメンバーが声をかけ合い、自慢の食材を持ち寄って作った芋煮やホタテ焼きを参加者に提供している。

最初は小さく始めた芋煮会も、観光協会と連携したイベント告知による周知の効果があり、また地元でとれた旬の物を味わうことができるとあって年々参加者が増え、年間約1,000人が訪れる人気のイベントとなった。芋煮による交流会は毎年メディアに取り上げられるほど盛況である。この成功を受け、現在は年間2,000人を目標としている。



写真5 芋煮交流会の様子

## 6. 波及効果

### (1) 経済効果と交流人口の増加

養殖体験や釣り船では県内外からたくさんの方々が南三陸町を訪れ、これまでの9年間で累計約1万3,000人を受け入れた。この観光入込客数と県の観光消費額単価により観光消費額を算出すると、新型コロナウイルス感染症拡大の影響があった直近3カ年を除き、これまでに町内の宿泊施設や飲食店

に与えた経済効果は約1億2,400万円と推定され、地元経済の活性化にも貢献したと実感している（図3）。南三陸町の総人口約1万2,000人を超えるほどの参加者を受け入れてきたことに私たちも驚き、交流人口を増やすという当初の目標を達成した感動を得ることができた。

|     | 観光入込客数(人) | 観光消費額単価(円) | 観光消費額(千円) |
|-----|-----------|------------|-----------|
| 日帰り | 10,500    | 5,893      | 61,457    |
| 宿泊  | 2,500     | 25,098     | 62,745    |
| 合計  | 13,000    | -          | 124,202   |

図3 経済効果と交流人口

（※ 観光消費額単価：宮城県経済商工観光部観光政策課「令和2年観光統計概要」より）

## （2）個性豊かな「しょくにん」と体験メニューの充実

当初は漁業体験などの提供を目的に活動していたが、漁業体験自体は全国的に行われている取り組みのため、「差異化を図ることはできないか」「もっとお客さんに楽しんでもらえることはないか」と考えた。そこで思い至ったのが、町内の8割を山林が占めるということだった。この地形を生かし、海だけではなく山林での体験も一緒にできるようなプランを考えることにしたのである。歌津地区だけでなく、町の沿岸部や内陸部の地区の農業や飲食業などに従事する20代から40代のさまざまな「しょくにん」に声をかけ、いろいろなアイデアを出し合った結果、山林に関連する取り組みとして、アンモナイトなどの「化石発掘体験」やカブトムシなどの「虫捕り体験」、海岸に漂着した流木を使った「ワークショップ」など、新たなメニューが加わった（写真6、7、8）。これにより南三陸町の自然を余すことなく発信できるグループができあがり、海山のさまざまな体験ができるという評判が広がって参加者はさらに増えている。



写真6 化石発掘体験

メンバーの意識に変化が生じたことも大きな効果であった。職業の垣根を超えて交流を深めるうちにおのおのが南三陸町全体のことを考えるようになり、町を盛り上げていこうという気運が高まった。



写真7 山林での虫取り体験



写真8 流木のワークショップ

さらに、活動メンバーが増えたことで積極的に外向きの活動も行えるようになり、現在は首都圏のイベントなどに出店して、自分たちの活動や地域の魅力ある特産品などを伝えている（写真9）。

そして、メンバーの一体感を生み出すためオリジナルロゴも考案し、ロゴ入りの「前かけ」や「手拭い」などのグッズも開発した。ウェブサイトなどで販売したところ購入者から高い評価をいただき、ファンが増えていることを実感した（写真10）。

このような私たちの多方面にわたる観光資源の発掘の取り組みが評価され、平成27年には観光庁の『今しかできない旅がある』若者旅行を応援する取組表彰で栄えある「東北ブロック賞」をいただいた。受賞を励みにこれまで以上に南三陸町を盛り上げていきたいと考えている。



写真9 イベント出店でアピール



写真10 オリジナルグッズ

## 7. 今後の課題や計画と問題点

当地区は三陸地域特有のリアス海岸で里山と海が近く、風光明媚な景観を持ち、1次産業が盛んなことから農林水産物に恵まれているものの、都市部へのアクセスは決してよいものではなかった。

しかし、三陸自動車道の開通により仙台までの所要時間がこれまでの3時間から1時間半に短縮され、交通の便が格段に向上した

(写真11)。

これを追い風にして、メンバーの特技を生かし、今後は当地区のみならず南三陸町全体の里山や海、歴史、環境の魅力を最大限に活用し、交流人口のさらなる拡大、地域の活性化につなげることが私たちの目標である。

私たちの活動の中心である養殖体験などのブルーツーリズムについては、地元の漁港や漁村の魅力をこれまで以上に取り入れて「海業」にまで発展させたいと考えている。

新型コロナウイルスの感染拡大により、旅行者が激減した時期もあったが、SDGsの理念に沿った県内の学校向けのプランに切り替えたこともあり、現在は県内の参加者が増えつつある。今後も引き続き基本的な感染対策を徹底し、乗客や参加者の安全を第一に考え、地元の「推し」の観光資源の魅力を内外に伝えてきたい。



写真11 三陸自動車道延伸で活動に弾み